

手話

原田真慈

手話、その指先の湾は いっせいに薄の投身を透かした

その島では無風が訪れぬことをすべての人が知っている それにならう

デイクアの車を見送らなくなったことに慣れるのと同じことだった

見慣れたナンバーの運転手はわたしを見なかった、

祖母の背中、水門、腎臓の音と かつてこの岬から曳航され沈んだ鯨の叫びは

どちらも長いあいだ、春泥に似通った遺失だった、

湾に還ろうと伸びる杉の激しさ、波と稜線の繰り返す孵化のただなかにある、
卒塔婆の密林が島を手話で語りつづけていた、みな静かなのでやがて倦んだ
貯水池の水面で睡りを止めた虻の、その激しさのほかにはなにももの動かない、

そよやそよ、などて山べを見ざりけん。妹はとてもしずかに泣く、

古い皮、声は煙になるから大丈夫だと背中に置いた手の、驟雨を待つ湾の
光る すべての島でみな睡る、手と字はやがて白線として糸と雨になる。

そよやそよ、混声の水門から還ってきた湾はふたたび最初からはじまった、
わたしが懐かしい手紙のすべてを読み終えてしまうまでのあいだに。

ふるはなみだの雨なるを、春のものとやひとの見るらん。よるは波、湾の、
指先の、

拾う骨の柔らかさよ

促されるような情力で手話をやめた手の、じゅうぶんな生命、動き続ける水
門